



K. Kishima ta



禁中貴女歌仙之図



首書目録

五性の名妻

えすこみふ仙

女今川

うほく五女傳

ゆめれ
すらし
ま月の
くつもやう

金藏のむ日
潮の満干
にのかんえ

ノミ於のよごり

旅帶の
松傳

帰女嫁と降向

有卦せ卦

延年

神祭

年月の早ぐうも

セタ乃和歌

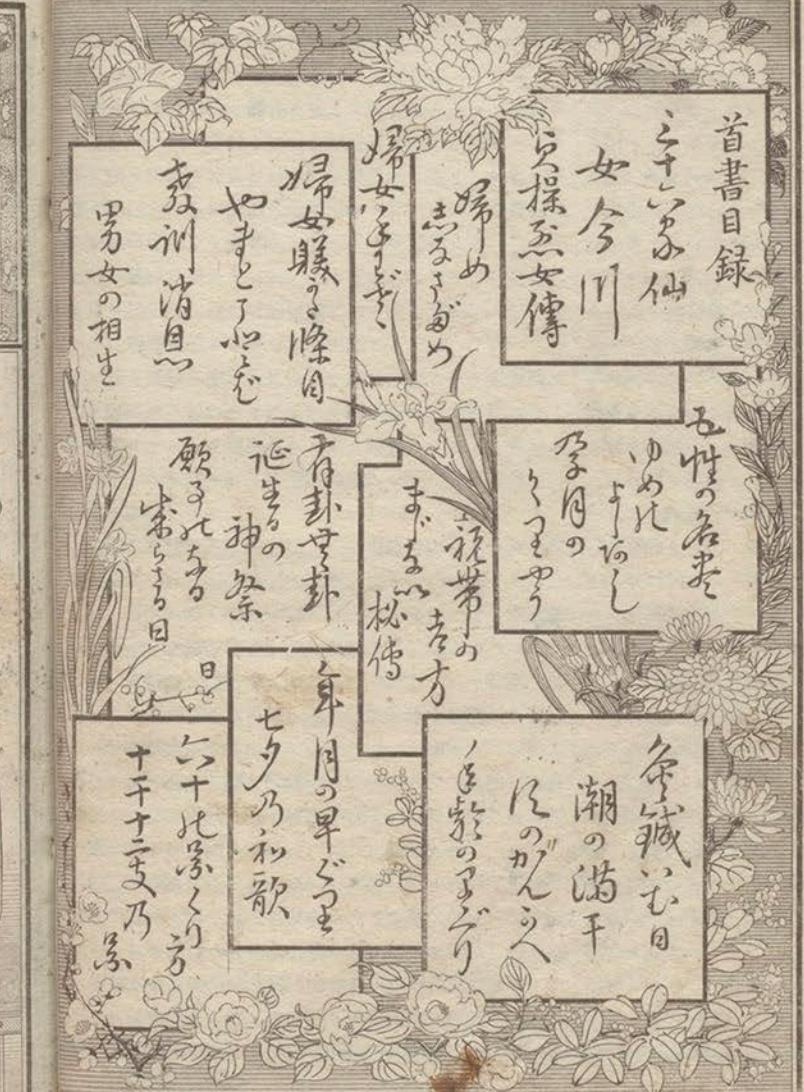
男女の相生

延年

日

六十比家くり方

系











右 藤原元真

さひ小けり

我山里のうの花ハ

坂根小きへみ

季と見るま

右 藤原仲丈

在明の用乃

光を見

ちど小

我身の

小け小

まかせよふん

春の日小

やかばとも草ハ

秋風の吹小づけ

そぞぬわな

秋の葉ふう

音ハーハ

右 中務

生忠見

やかばとも草ハ

春日野もよも

まかせよふん

春の日小

やかばとも草ハ

秋風の吹小づけ

そぞぬわな

秋の葉ふう

音ハーハ

○女 今 川

一考の心かくすく女

の道のうふらざる事

一若き女の無差の宮寺へ參

りたのしむ事

一少しだ遇ちと改めま破

ひたりて人を恨む事

一大なるも毎へおぼとけ人

小かくる事

一父母の深き恩を忘れ老の

道おろそかる事

一夫をからめ我を立て天

道を恐る事

一道小肩きとも榮める者

一うらやみねがふ事

右 藤原元真

さひ小けり

我山里のうの花ハ

坂根小きへみ

季と見るま

右 藤原仲丈

在明の用乃

光を見



一正直ふしておとろそだる

人を輕一むる事

一遊び小長さち成ひへ座頭ざつしゅを

あらめ或ひへ見物みぶつをこのむ

事

一女の猿利根さるりね小迷こまわひ万るの小

付け人つけにんをそくる事

一經裏けいりとく躊躇ちうりの心渥じゆく

人の喰くりを耻はずがる事

一人の中言なかごんを企て人の悲ひ

を身み小たのむ事

一衣冠いこん道具うぐいすおのき美番みばんふし

て召仕めしへ見苦みにくき事

一貴ききも端はきも法ほうある手てを

角かくへ争あらそひを取とむ事

一人の非ひをあげ我わ小智こちあり
とおきふ事

一宝珠ぼうじゅ門もん小對面こたいめんをとす

とも傍近わざまもする事

一我今後わがきを知しらむ成なひへ奢とが

すまゆひへ不足ふそくの事

一下人の善惡ぜんおくをそぞろ呑のつ
うひ様ひやうなどしかざる事

一舅姑おとうごふまきまきかして人の

そまきくする事



七



一絶子小説かして他人の
喰けりと耻ざる事

一男たゞあはゆく聞近き祝
歌なども祝みを過事

一道を守る人を讃ひ我を魚
つらふ者を愛する事

一人あす時に我無まへん小
きのせ恋をうけし無れの

草、
右の條と多ふ心不驚べし

先家を守る願を失心かし
西やも每も我をなほ失

の心不隨ふ廻し天主天太陽
やうて強く男の道あり地へ

富少くわらうる小女のは

あり陰に陽ふ地ふして地自
然の道理あり天晴の道す也

みたゞんればあそ天の如く
致ひ貴がへ是も時も天也

のなすうされば幼み乍り
心ぞ人やもと直ある方ふ

あそ全假あめある懷りかは
くも以てだふ不近うるべ

ううむれを方内の品ふ隨ひ
んに善惡のあふてるとのふ

るをまとある哉愛をぬよ
ふをねむよ申傳むるあり

んれ善惡を給ひまへ莫人

の親むも嘗てを見たうふ
の嘗て見たうふ

一 沖原左大臣

隠夷

倭文

乱世
飛
舞
禍
行

モ
タヌ
タヌ
モ
モ

モ
モ
モ
モ

光孝天皇

天皇

君
君

君
君



ひ知るとのふうあれば家が
は別の一處のあま家を亂す
女のかくまとまき隨ある

をぶほむとりべ能タホ我
と心をかえりて悪き成去
善あらうとすせしんに五
度の難をうけて生きたりを
つとも或ひに善全を至
りうりの悪くとかくうるを



みふ幼きどり比惱しより
る便し男子少へ師をどう身
を修る道を習ひしむと雖
き女どと学ぶのまれ也
此ちるふ女比法あるあと成
知らばうのあり耶まよ
美行ひとと諦み口を一き次第
あま寒ひどく他の家へ行
みふ道ひて舅あうとめふ往
きまくへ背へくつちあき
べ者行をほくをる第一うき
面ふ御ろのを飾り髪のこ
ちを梳ふのみあて心のやが
みをたぬくとあらん稀あり





心がし直らふ食るのあは
貧乏の妻らへうとも恥ぶ
らず邪魔を多々當とひふ共
智ある人ふうとされぬし
忍じて残善惡を知ぬと思
ふまの心わざやこのあぐ
我行ひ善と名をふれし世話
あく短髪あぐ我心ふしあ
らすと知ふし大うご人を
召すと日月の奈木園土
を照したまふぬく心をめぐ
らし其人不道ひて召すふ
へまをのあり穴質く

女今川子



ふ時心皇后御宿胎ふて持小路月成れ
バ石と腰小拂み征伐竟りて後小誕生
あら人事と願ひ冥福を發し玉の海神
御靈と守護舞ふく新羅小者を皇后直
ち小征伐し玉へば新羅王大恐怖て
忽く小降表し國の寶と挙げ永く日本
奴どあらん矣さう時小唐國の高麗百
濟の王も御家勢小廢て降れり是三韓
と云今朝鮮ふり而して皇后範質の
坂玉ひて御安座ありし皇子ハ即ち恩
神帝也て皇孫天政し玉小車六十九年
御年一百十三小て薨じ玉へり。



玉ふ帝御悦喜妹めなうと。御后として

寵愛し玉ふ御姫。好み玉ふこと長だし。
故て帝河内の宮づくりして造し帝御

御小をよせ通ひ玉ふ。或時帝姫と俱小

紀伊の和歌浦小行幸し玉ふ小機か裏
風發り御船を覆へさんと。各八大山

忍れ騒はれ、姫船の袖小立せ玉ひて
日本ハ天日つぎのみことのり

我大きみの國どしうそや

詠じ玉へバ風波忽ち小機りけり。和歌
歌の典音と極め玉へバ後玉津嶋の神

と号け。神と崇敬せり

一建禮門院ハ平相國清盛の御女小て

高倉院の御石安徳帝の御母。ぶり然

の御絶法來るふより。鎌岐八幡へ安達

帝平氏の一門と共に小落玉ふ。小義姫道
來り。平軍利あらばして。筑紫小至り。平

家滅亡の陰門院も御母二位照の小縫て。

入水し玉ふと義姫助け奉り。称小上て
洛東吉田の疊り小宿らせ玉へり。此時

門院女御花を御覽有て
終ふよき消へきものを化野付
つり女御花手向よやせん

詠じ玉ひ。小原の奥やまとだ。世の臺め
見へめ所と聞召され。終の御出家の木
意遂させ五ひ小原小移り草の庵小住
玉ひける。

岐帝の皇女小て御母ハ
大納言公經鷦の御女あり。
門院御名ハ悦子甲奉り。御心やさしく
才智深し。或人嵐洞へ祭どき。和歌傳の
和歌小



あたしの文字牛の角もにぬるな文字
ゆがみ文字などを君にわざほほ頬
と説くふ此三文字はこの牛の角の
文字ひいの字直な文字かーの字ゆめ
み文字にくの字ふてこいしくと云て
とあら是門院御幼少の時のことなり。

後小松院の宮

女小春

歌

他小勝れし

有りある時夜の御殿

へ召されし小御殿の下山かを廻小山

へし帝を弑し奉らんと以常あやしみ

王ひ事の様子を孟王へハ宮女猪夷立

て渡を拭て奏をる小妾ハ南朝の小杜へ

し者にて君を弑し奉りて南朝の仇を

報入と思ひ侍るあり疾く命をめさる

可と帝其思ひを御候ありて命を助け

事なく大内を出し王ふ此苦女の腰

出生し王ふ里子ハ一休禪師あり

相愛式部ハ大日法華經の如め小て被

め和泉守道良小娘を因て和泉式部と

呼べり秀才の婦人小て和歌の達人な

り上東門院の仕ふ式部貴船の社

小詠て

物おまへば深せ聲も我身より

おくかき出る玉かとを見る

と

詠けれど貴ぶね神感じ玉ひて

奥山小たぎりて落る澣津湖も

玉ちろむり物あちあひゆと



答へさせ玉ふとなむ又とま門院女房達を具て番書鳥山小行院し玉ふ性生上人是をさ。明日此寺小鬼来るべし門を開て一人も出あふへからばと弟子小命し其次の日門院登山し玉へば弟子等是を見てぞいや鬼来れるぞと駆けめば武都

烈女傳



くらきより猶も暗き小送べし
はるか小照ちせ山の嶺の月

と詠じ門の柱小書つけたり。性空之を

きいて法華傳讀誦のをり成しが

従冥入冥水不聞佛名と

云ふ文と議合せ哀れ小思ひ門を關か

せざりと式辭後小平井保昌の妻と

ふれり。



赤浪衛門は大江匡衡が

裏小て容貌心むへ泉小陽

れ。和歌小達し諸藝小わこれり、衛門が

子の舉用一年病ひ小駄侍るを、いとは

うけれど月日を累ねないと重ふりゆけ

ば。衛門と悲み住吉の社小詠で我子

の翁小代らんとを神小申して

かはらんと折る分ハ惜からで

さても別をんとぞ悲しきと



小糸り王ふハ誰そと問ふ機笛の語く

特類殿小見へよ奉たりと其人の答
る小其ハ此庵小侍らひと云時頬物か
け小庵ひ己小詞をかハさんと為せし

が思ひ止まれり機ぶゑ心のやるせな
く涙ながら小

山ふかみ思ひ入ぬる柴の戸の

よこその道小我とみちびけ
と詠て桂川小ゆき身を捨て死しぬ年
僅さう十七歳あり

伊勢大輔ハ上東門院の女房小て帝

源家子和風

山里を

ふち

寂

やまとりなる

人國毛

ひとめやトモ

わきぬや

たま

あわ

わうぢや

あわ

わうぢや

わん

わうぢや

白菜う茎



相思と促し玉へバ伊勢大輔音の下よ
以ふしへの奈良の都の八重ざくら
けふ九重ふにほひぬるのな
と説て奉りければ列坐各人ちどろき
思じけるとなむ

小督局ハ櫻町中納言重乾卿の女ふ
り。當時禁中小さいて比ひあき美女小
て姫徳正しく琴の妙手あり。高倉院の
中宮小立て。御義愛源かりーと。平相國
清盛。憎みければ之の恐怖てある夜大
内を忌び出て行勘知れざうし。かば。帝
斜めあらば數かせ玉ひける。始小八月
十日餘りの夜くまおき月を帝御覽あり
て。御承小くもりせ玉ひ。添更て後方
人や在かと宣へ。彌正大輔仲間あり
て。御應答申ければ。汝返す奉れと宣へ
ハ。仲間玉座ちかく進めば。小督。今岐嶋

小住めりと聞ぬ汝行て尊えさせよと

直へば異まりて仲間ハ御書を申うけ
察の馬小打のり壁疊小ゆき笛を吹て

暴ねけるふ龜山の邊り小て松風小誘
小琴の音の聞ゆれば仲國駒を尤やめ

て其所小行ければ雖ふべくも非局
の福音あれば案内して内ふ入り帝せ

御書を渡し御返し文を愛どりて駒を
えやめ大内小かへり小督の文を捧け

しかば御恩ぶいめあらざりける

一津國芦屋の里小荒名日の少女と
て容色をぐれし者あり同國荒原里小
杜士と二人少女の思ひをかけ妻

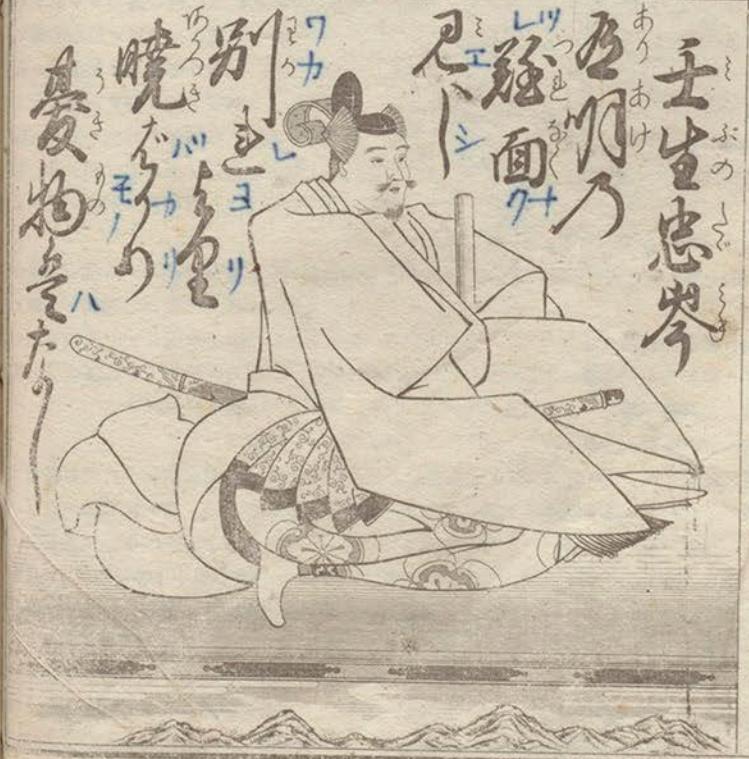
人と父母小請こと頼あり父母も何を
し難と定め駕け
られば二人の男小對ひ今見
るふ生苗の水鳥一羽居れ

是を鉢とめ玉子と望とあへし
人ハ鳥の頭を射一人ハ鳥の尾と射た
り是小ちいて少女思ひもづらひ

生田の川ハ名ふて皆有げんと
よみて入水せり二人の杜士も之を見
て川小飛入り死小ける此三人の塚を
お女塚と号げぬ

關防内侍ハ後冷泉院小仕へし官女
あり和歌の妙手小て最唯妍あれば帝
も仙洞をも御心をかけられ其名高く
聞へりる年の八月十五夜月隈あ
けれど内侍を召れ歌よめと命られけ
れば内侍頃小

かへむのり映けき影ハい小へへの
秋の空ふもあらじとを思ふ



と詠じけれど、帝御懶からざりしより。久時官女さう三四人ニ候院小奇にて物語りあはし和歌等詠あひける小内侍ハ物小よりふしつ。あれ程枕もが云て臉を出されければ内侍

あと云げり大納言忠家卿へかねて内侍小心うつせし人成が折ふし製糸の外小てこれを聞き然ば枕を奉らんと侍て臉を出されれば内侍

春の夜め夢むかりなる手枕（おもてまくら）小かひあく立人名こ持惜けれ



と詠けれど忠家卿返と思しくて笑うありて春のよがなま手枕を

いわいかひなく夢ふあもへ死

かく詠聞侍外官女尋み笑ひありりける、

と詠じけれど帝御懶からざりしより。久時官女さう三四人ニ候院小奇にて物語りあはし和歌等詠あひける小内侍ハ物小よりふしつ。あれ程枕もが云て臉を出されれば内侍

あと云げり大納言忠家卿へかねて内侍小心うつせし人成が折ふし製糸の外小てこれを聞き然ば枕を奉らんと侍て臉を出されれば内侍

春の夜め夢むかりなる手枕（おもてまくら）小かひあく立人名こ持惜けれ

と詠けれど忠家卿返と思しくて笑うありて春のよがなま手枕を

いわいかひなく夢ふあもへ死

かく詠聞侍外官女尋み笑ひありりける、



○今出川近都ハ驚取様中附言伊平衛の女あり同胞を和歌ふ名を知らりて世高達衛た歲のとき父伊平波の水とつ酒を度和歌をもせしが水を落水のうごと飲むて人同ドからんもあらうとぞの江比童ごほりを詠り父金うきも見と大歌し其和歌中ふも秀逸あり作者は誰ぶらんと問ふ近衛ありと答へり是の歌仙のかほ竹かる可と云しが其詞の如く五代の初撰者をさせぬと云ふべかられり

○徳大寺左大臣ハ皇太后宮少仕へ少侍後計ひ五ひ一ね又の夜達んと詠す侍後ハ侍女御前ハまどろみも爲し更ゆく鐘の音を聞つ。

侍女ふあけ行し鐘の声まけべ

あらぬ別れのよりへ物わへ

詠るが秀吟の聞へりける。又左大將或夜侍

従がりと小居ひ五ひ。後も明ぬれば墨さぬぐ
の別れ。然れど侍餘波を慕ひ遙コ大將の御
あと見送り、涙を流しけれ。太袴から格難き
西影身ふと覺五。御供の體人を召て侍

從が餘波も有さむ。見稽がし。成立わへて。
何も共云て命玉。命玉。侍藏人。侍從が

見ゆく。立さる所。行け。み折や。難の声

聞け。ねば。藏人。うりあへぞ。

物か。いと君がいひ。あん離の音。乃

け。さ。もいわふ懲しかる。しん

と詠しけれ。侍從即座。

侍は。こ冬更衣く。被も。づら。を。

別れを告る。せり。北音。ざく。え。

と送をなしける。本難客は。うそ。と。大將

大。小。感。ト。玉。ひ。藏人。小研。領。五。ハ。い。侍從

ハ。侍。さ。の。御。歌。名。だ。か。く。て。世。か。侍

官。侍。従。と。社。し。藏人。も。物。か。い。の。體人。と

世の人。云。あ。へ。り。

○。難客。ハ。左。襷。門。豆。が。乗。る。て。容。貌。顔。る。

難客。進。る。ゆ。く。盛。遠。ふ。譯。し。難客。

從。ひ。樂。ら。そ。と。安。一。と。難。ど。も。夫。ある。身。よ

自由。なら。ば。夫。宣。を。害。一。五。ひ。御。身。よ

従。が。ふ。可。し。臥。床。ハ。示。々。の。所。あ。り。教。へ

約。し。難客。ハ。其。被。髮。を。切。て。男。の。容。と。お

り。盛。遠。ふ。教。へ。一。尺。ふ。臥。て。夫。よ。代。り。

討。れ。其。枕。邊。小。禪。々。と。認。め。る。遺。書。

の。文。一。首。の。和。歌。あ。り。

露。あ。か。き。表。茅。原。子。迷。ふ。身。の。

い。と。ソ。脚。路。よ。べ。ら。と。悲。一。紀。

盛。遠。立。退。笠。月。の。光。り。ふ。難。見。れ。八。豆。

が。首。よ。非。ぞ。一。て。難。客。の。首。あ。ね。ば。大。お

あ。れ。後。悔。あ。れ。ど。も。せ。ん。か。自。ら。名。の。

汝。が。母。衣。川。を。殺。さ。り。と。云。ふ。さ。り。て
難。客。進。る。ゆ。く。盛。遠。ふ。譯。し。難。客。

從。ひ。樂。ら。そ。と。安。一。と。難。ど。も。夫。ある。身。よ

自由。なら。ば。夫。宣。を。害。一。五。ひ。御。身。よ

従。が。ふ。可。し。臥。床。ハ。示。々。の。所。あ。り。教。へ

約。し。難客。ハ。其。被。髮。を。切。て。男。の。容。と。お

り。盛。遠。ふ。教。へ。一。尺。ふ。臥。て。夫。よ。代。り。

討。れ。其。枕。邊。小。禪。々。と。認。め。る。遺。書。

の。文。一。首。の。和。歌。あ。り。

露。あ。か。き。表。茅。原。子。迷。ふ。身。の。

い。と。ソ。脚。路。よ。べ。ら。と。悲。一。紀。

盛。遠。立。退。笠。月。の。光。り。ふ。難。見。れ。八。豆。

が。首。よ。非。ぞ。一。て。難。客。の。首。あ。ね。ば。大。お

あ。れ。後。悔。あ。れ。ど。も。せ。ん。か。自。ら。名。の。





塔乞とうごをあとを吊つるひぶる。女僧じょそうあり。後巻最初の篇

所ところへ來くわり見みたは筆生度ひしゆどなり。虎渠こくにて

露あわせあさ拂ほす。微すこきもてあらば

星花せいはながそもふ秋風あきかぜをそよぐ

と感かんし取とる也よ。伏流ふりゅうのものかね

海うみせそと思おもふめ。一葉いっようごろも

いよきの處しよの例たととわくらん

年としの分ぶんき遊ゆう遊ゆうする娘むすめある眞娘まむすめあり。

○化粧けいぞうの遊ゆう遊ゆう者しゃ少すくない喰く喰くて心優こころやさき

女めなり。普教ふげ五郎ごろう時とき教訓きょうくんでのぞむ。剣つるぎをも中なかへ

成なれり。時致父ときちふの仇ごを報むくるもの日ひ夜よ。行ゆれ。劍つるぎをも

んさの少すくない喰く喰くて心優こころやさき

化粧けいぞうの遊ゆう遊ゆう者しゃ少すくない喰く喰くて心優こころやさき

女めなり。普教ふげ五郎ごろう時とき教訓きょうくんでのぞむ。剣つるぎをも中なかへ

成なれり。時致父ときちふの仇ごを報むくるもの日ひ夜よ。行ゆれ。劍つるぎをも

んさの少すくない喰く喰くて心優こころやさき



○婦女志承さだめ

女帝

○日本女帝の始め人皇三十

三代崇峻天皇崩し王いて始めて建天
皇の皇后なりし豊御食欽星姫即位し
玉小是推古天皇と申奉れり後是さき
小神功皇后御座せども帝の位小ハ即
玉ハを然れど六拾九年の間ど攝政し
玉へるか故王代小加へて十五代と為
玉へり又角劍天皇一二代景皇孫天皇傳明天皇持統天皇元明天皇元正天皇孝
謙天皇稱德天皇明正天皇后櫻町天皇二各女帝あり

皇后宮

○皇后い天皇の御妻あり御

后とも申し奉つる天子小ハ十二人の御
妻ありて其正妻たるを皇后と称へ

其他ハ后と申せとなり

皇太后宮

○皇太后と申ハ天

子の御母君あり或ハ曾母とも申し
或ひハ女既既と称へ奉る此御茶ガ天皇

と成玉へば御妻をと妻がて里太后宮
とあがめ奉り又何門院とて皇后の御

門名をつけて称へ奉れり

内親王

○皇子を親王と申し奉

ことハ文武天皇の御宇より始まる
此時皇女も親王の宣言を蒙らせ玉へ

内親王と申し奉るなり然れば式子
内親王又祐子内親王等と上小其皇女

の御説を添て称へ奉れり

姫宮

○皇女のいまだ内親王の宣

三宮と頗次小申し奉れ
り或ひハ公主とも申
せり是ハ支那のと

ふへふり



○女二宮御と
爰を圖

准后准后と申い後妻のたぐね也



二十一



御息所

○親王の御妻を御息所

と申せり。原ハ妃平サキと称へり。御息所と申せるのは始い。人皇五十五代仁明天皇。あバ諸方小行幸し王ひけれ。頃々小行在所を建させられ是少時休息玉ふ其宮を御息所とハシヘリ。其後此宮を阿保親王小賜へる。親王御妃をこれ小移らせ玉ふより此稱へて少これり。

法姫尼

○昔往皇女の女僧

となり玉へる多し。是をかく申し奉るなり。

北政所

○板政閣白の御臺を北

政所と申せり。攝政も閑白も天子小代りて政事を執行す。玉へる官能真人の御妻あれバ。北政所といへるなり。

御臺所

○公方大臣衆の御臺を

御臺所と申せり。皇居中小臺盤所と云へる官舍あり。是と御臺所とも云へり



る有て。次を勾當内侍久高橋局と云ふ。

其つぎは姓氏を名乗てたとへば源の
せいある。いは源内侍と云へて藤原あ

れバ藤の内侍と云へり。そのつぎいく
小名をつけ伊勢相模ふどいへり。此宮
女十二人なり。

北の方 ○ 封君の御妻を北方

といふ是ハ北ハ陰のかよひ
て。おんあむ陰性あるかゆへ
小。これにかそぞりきとのう
さとい云へるとぞ。北の政所と
いふもぢなじ義あり。すゝ五

位以上のひとの妻ハ命婦と云
ふあり。

妻 内儀 妻 ○ 此等の称へ奉士族の
裏と云へり

妻 内儀 妻 ○ 此等の称へ奉士族の
のとあへふ。女房とハ下民のつまの
名あらび。

奥方 御方 内室 内賓

習字 婦女の學び嗜ふみおく藝ハ
さゆくふ有るが中ふ。其の身がらせ貴
き殿しきふも。學びぞんば有るべあひ
きる藝。いは讀書のみみち小て琴三絃お
どの曲を習へる。いはく容易からむし
て少時をてあらば忘れやをく讀かき
の豆。いはそれ小比ぶれば習ひやをく
して忘れる。とく文字を書ざる人ハ萬
ふつけ不自由あるもの小て。あらざら
るの基とありぬべし。

然れば幼稚きよ
り習字ハ勉め
て學ぶべし
一日か一字づ
く覚えるとも。一年
の間か三百八拾餘字
おほえり。文字を一字ちば
申れば千金ふもあざるといへれば多



歎の文学を知らば巨萬の金と頗有た
る富人小ひとし。

讀書

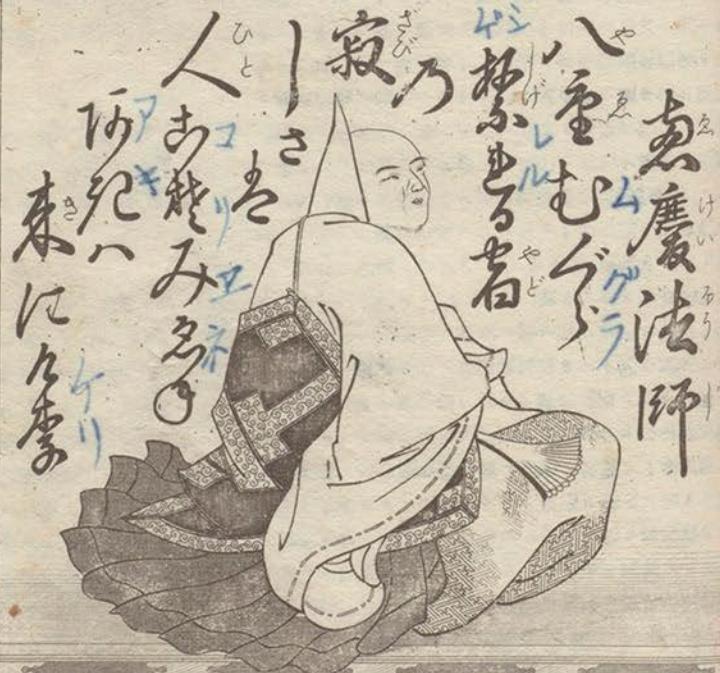
物よむ藝の文字とならひと
對のものにて、見てての物を讀ざれは
眼ありて、首の如し。日用のてい云も更
ふり、身と極め家とと一の小車あるどの
書を傳ふ就き父母の教へふ従がい。學
ぶべし而してよく讀をを得ば。其理由
あるひに文学の義ふども問ひて知へ
し物とよく讀とも。何の
書を傳ふ就き父母の教へふ従がい。學
ぶべし而してよく讀をを得ば。其理由
あるひに文学の義ふども問ひて知へ
し物とよく讀とも。何の



守り玉へる
神の有しとぞ。古へ小
高位の御人の御妻の白から衣の蒸め
ひを爲玉へるも有り。然る小現今へあ
らね共三四十載も以前小い衣服を戴
へる衣服を



裁縫
衣と裁ぬふてハ婦人の爲れ
きざの第一小て高貴も人も卑贱人も
久べがうざるてあり。日本時代のむう
しむる針女と云
へる衣服を



曾根好文
肉食社會を
わざる
私
人うち
来もあら
寂乃
人あ能み多
所紀へ
東に多幸



縫こと出来ざる婦入たまさ小有い費
小焼べきと小有るあり。

養蠶蠶を養ひ綵をいくことも婦
女の養のひとつて習ふべきなり。今ハ製

縄の地小のみ此女工を爲ること成
ねれ共覚えちきて然るべき物あらん

既尔古へも今もかとじけふくも皇后
そら此と自ら爲王へり况や下民の婦

女子小ぢいておや養蠶製縄のことを
知らハ僅かに一をちの縄も容易

できるもの小非ざると知りぬ
べし

綾綾学綾 宝つむぎ字をすむ
ことハ農家の婦人のことだと思ひ居人
も有れども是ハ女紅の一小して糸竹

の縄よりも優れるあれど辨別もあく
いやしむる人もあり笑ふべきあり
是もおばえちきて可あり

機械 機械の事 婦人の一疊などは是も
かる人少くも農家の世人の外の事

小て神代のとき
よりして始ま
ると云ど之さと
あらん人皇
六代應神帝
つかひを興國小遣し
機女を召す然る小帝崩御の後小興
國穴穀兄媛弟姫の四人来朝し十七代
仁德帝の御宇模津池田の里ふぢて
鐵及び種々の縄を織さり是日本小機
おるよざの始めありとぞ



組絲結くみ

様をくみて緒と

お

そも婦人の手藝あれども是も今其職工ふらでハ學ぶ人有らざる歎惜

みちきても可^さりあり又經小てさまぐの形小結^{こまつ}が是も婦人の知らずして叶^はめ藝あれど知る人少ふし近頃毛いをもて種々の組ものを爲いよろしき事あり

髮結化粧

髮を結ひ化粧をな

れい元來婦人みづから爲るものあれども化粧^{けう}自あいも髮^はい他の手をかりて結^{むす}はせる習慣^{くわん}と^はなりぬ。副^{そば}食^く飯^{めし}を炊^あき切^きぎざみ蒸^あさきの事ハ其れあにべき人小任^{おとし}なども候^うり何^{いか}して炊^あきて可^さきや奥島野菜^{おくしまのやさい}の割^{わり}烹^なは何^{いか}どをるやを知^しらばして叶^ははせり是も心得べし。

和歌

初歌ハ日本人ハ歌をんば有

べからば他の遊藝^{ゆうげい}とい同一のもの有^うう^い然^{ぜん}小婦人^{こふじん}ハ樂^{うき}びよみて良^いま



古へより戯女^{うきじょ}も遊女^{ゆうじょ}あとの和歌^{わいご}を詠める者少^{すくな}あらばして名歌秀吟^{めいごしゆん}多し和歌^{わいご}い天地^{あまぢ}と共ふるこりて生とし活るものハ自然^{じねん}小^こい出^だせる藝^げあれども文字の數^{かず}も定^{さだ}まり有て調^はづらひ手余^{てゆ}於波^は假^あ字^じづのひ等^{のう}のとども有れば師^しの教へをくべし是山次^じくものハ運歌^{うんか}俳諧^{ひげ}おも嘆^なみおきてよろしへし

文章^{ぶんじょう}文章ハ作る小法あるものなれい脚^{あし}小^こつきて摩^まひ作り漆削^{しっざく}をこふ人^{ひと}もあれど其れハ此道の極意^{ごくいつ}を知らべし

茶湯

茶湯^{さとう}ハ奢侈^{しゆし}の遊藝^{ゆうげい}と云^いへる

九六

若原義孝よしと

君^{きみ}がた免めん

金きんさへモまが取とりあひと花はなけむかゑ



さる言あり茶湯い買素儀約をもと

爲のものふ

て且礼儀を正

ふまるへ

然れべ婦女子の

學びてよろしき事

ふり是も師の教へを

シクベし

香道 拝花 盆山

是等の日

ざハ多く賓客を饗應小用あるものへ

されば學びてよろし

圖画

画ハ派習いを共少しきがけ

ハ婦人小ハ益あるもの成べし

琴曲

物小て婦人の習ひ彈てよろしなり和

琴の方こりハ神代小弓六張をあらべ

ズ絃をおあらせしを始めとぞ又支那

小でハ種々ありて瑟との並ハサセ七絃



本どりあはと御琴とのぬれ十三絃
今日本小て裏う再現ところの物也此
事みて和名ハ筑紫琴といへう。これを
彈小唄歌ハ必うん祖といふものを用
ゆる者ある。早晩さまくの唄歌あ
と用ゆるをいへ成り。其祖と称ふ
るものハ八橋松校の作り出せるもの
にて表組七曲うちくみ六曲を合せて
十三組と云ひ。其他小新組といふもの
十一曲あり。其名目左小記せり

表組

七曲

梅枝又千鳥の曲ともいふ心つじ天

下泰平薄りき雪の上以上

表 細 六曲

うをぎぬ
相畫須廣
四季

の曲巣の曲雲舞曲以上
節組
播姫明石四季の友末の松空
蝶羽衣四季富士雲井弄才思ひ川新妻
井弄才飛燕曲以上十一曲

○三味録○胡弓○月琴ふど琴と同様
小今もてえやせ共琴と云ふ連か小方
りて喜しきもの小非ぞ
婦女手藝

婦人贋のと條目

一子として親小背くと勿れ
一女どし男小勝事なかも
一下人として主人小背くと勿れ
一主人として召使ふものを貶しむ
ること勿れ
一召つかふ男女も健の子あり。人と
して子を憐れまざるは無きを思ふ
こと





きよへ知る

爲ことハ早く爲しなし難きこと
ハ早く断るべし
明日のては今日より心かべし
總て春の事ひ冬より夏のてどり春
より秋の事ひ夏冬どり秋より心
樹てありゑ



○猶其他	さよくほり書くし
かとー	(名)まと調終
教訓之消息	
何某の大納言	
恩女送詔小	



金所へ越たまふよしまこと空より出さ
く覺へまはらせ体隨分心やさしく細
石のいえほど成て苔の生きて繁昌し
て末長く休ひ奉らせけん先ハ硯すむ
かひ一筆申入まいかせぬなり第一慈
悲の心あ



かゆたまへ御や唐も守りおえしよ
しまゑのせ候

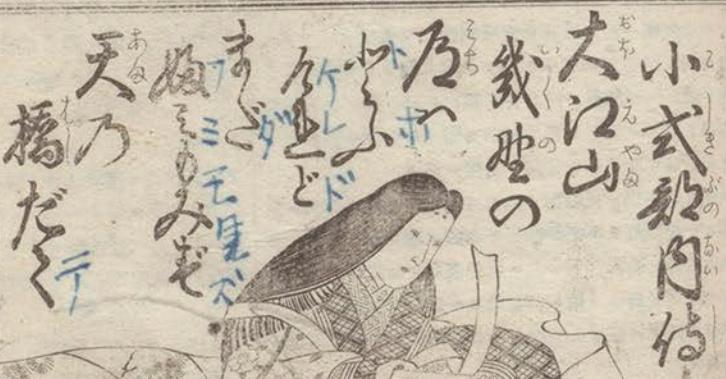
第二客人の御きとう様ときれい心の中
さへる事ありて無念のと様とも聊其
氣しきあき様ふとりもやし高きいや
しきへど無く打むかひ春の花葉ハ



冬の
秋の
千草
ハ葉

しも時
うつる共どう小
れど物語して想ふもてふぞべしそ
れ共年をかう人の餘り小睡じげある
も如何あるべき只何となくかきく
き様小睡いづく候ひんと社あらま
本へく

第三百二十九の者危険引して何事も



思ふまゝ小成らざる事有べし能其品

をいひ聞せたまふべし候令異見する

とも人目をさおじく有べらま況て

主など聞たまふときハ跡くちをし

と思ひ候いか小み免容うるいしき児

女房もはらだてかる顔せひ見ゆく

きもの小て候聞入まき者と見え候

れい只何とあく里へかへし候へ餘り

小教訓ほよく候てハ退屈して有らぬ

事をわ餘所へあしまさ小云ひあへ後

小ハ遊うせ候うせ候なう歌小

みよしの菜瀬の川の川瀬に

鴨ぞなくある山陵小して

此心にみよしの川水早し鴨ハ水小住も

の成れども餘り水をやま所小い住が

そく波む所小遊がものなり况んや人

ばけしき所小い住がさし

第四夫婦のあひご高きも戯しきも悲

事こそめでとく餘用の用も

度へ度かうとせまうとせまうとせまう

思ふどき見おとされぬ様

さりてなみた

あふ可し浮世の中のありさまをほくく見た

よひて心を長くもちたまひ行未繁

昌あるべく候

つらけれど恨んとこそ思ほえん

唯ほく未をたのむナリ

是等のことりを実とおもひまゐうせ

候仍又あるじ遠路へ行たまふ時又ハ

室内用あげくて草野の時ハ女ながら

も憂むすむび用心して心をつければ

も諒めなまふべしさりとて又餘りを

く教候の人もけいしま者小て候只

何でも改る事いかじ有べく候

浮世納戸

夜とお先

鶴乃井

行

寝

春

秋

夏

冬

月

年

左京左支

今も

絶

思ひた

はうや我

人情多有

モダ

云

と

だ

が

な



○男女の相性

男木女火吉	男木女木詳	男木女土吉
男木女金詳	男木女水大	男火女火凶
男火女土大	男火女水凶	男火女水吉
男火女金凶	男土女火吉	男土女土詳
男土女木詳	男土女火凶	男土女水大
男金女金凶	男金女水大	男金女火凶
男金女土詳	男金女木凶	男水女水詳
男水女木大	男水女土凶	男水女火大
男水女金詳	男水女火大	男水女火凶
男三碧女一白 大吉	男三碧女四綠者	
男三碧女九紫 吉	男三碧女六白 凶	
男三碧女八白 凶	男三碧女七赤 大吉	
男三碧女三黑 凶	男四綠女一白 大吉	
男四綠女三碧 吉	男五黃女二黑半吉	
男四綠女六白 大凶	男四綠女八白 凶	
男四綠女五黃 凶	男五黃女九紫 大吉	
男五黃女八白 大吉	男五黃女六白 吉	
男五黃女三碧 凶	男五黃女二黑半吉	
男六白女一白 吉	男六白女二黑大吉	
男六白女九紫 大凶	男六白女四綠大凶	
男七赤女二黑 吉	男七赤女八白 大吉	
男六白女七赤 吉	男六白女五黃吉	
男五黃女一白 大凶	男五黃女四綠凶	
男六白女三碧 大凶	男六白女六白 吉	
男七赤女九紫 大凶	男七赤女四綠凶	
男八白女一黑 凶	男八白女五黃吉	

○本命九星男女相生相剋



○ゆゑの善悪うふあひ

ひきき夢之部

一ふ二だり三事が
あらはりると見れば
不し出もとみれば
神のやくみと見れば
ぬきひり出と見れば
宮なまきを見れば

野山山あそぶと見れば
松ちうえらと見れば
合水おのむと見れば
ヨシを得てと見れば
ちしきげと見れば
米を内へ食ふと見れば
木ちくふと見れば
キダムを普ると見れば
ひやふと見れば
金銀貨をだらうと見れば
まくらすと見れば
そうさきいと見れば
内より人間とみれば
火車あるとみれば
小舟のると見れば
さしきなまくと見れば
大あきふると見れば
万葉ふと見れば
かまうぶると見れば
たからをえる
大きなる

寂さび
石運せん
達法師わう

者立チマ
立チマ

眺アガ
かアリ
下アリ
立アリ
外アリ
程アリ



○ゆーき夢之部

夫やうしのさんあると
山くぞざくとみまば
くも赤なまと見れば
家々あつおもとみまば
白布くつと見れば
地震ゆると見れば
いたみみざとみまば
枝多くと見れば
ああげるとみまば
かみなまきとみまば
坂を下るとみまば
坂を下るとみまば
病んでる

夫やうしのさんあると
さとがんほ繫
おもとと
くすり
病人である
ああだと
さくらん
心小さると
やよびあり
力らずある
くわくと



○孕月のく里法

孕み月を知らんと思へば此圖のと

く人さ。

正二二三

正二二四

正二二五

正二二六

正二二七

正二二八

正二二九

正二二一〇

正二二一

正二二二

正二二三

正二二四

正二二五

正二二六

正二二七

正二二八

正二二九

正二二一〇

正二二一

正二二二

正二二三

正二二四

正二二五

正二二六

正二二七

正二二八

正二二九

正二二一〇

正二二一

正二二二

正二二三

正二二四

正二二五

正二二六

正二二七



六八十月

東の方

○懐胎着帶吉方吉日

正九

十一月

南の方

北の方

○懷胎着帶吉方吉日

正九

十一月

南の方

北の方

○此日いづれもよし

正九

十一月

南の方

北の方



口者 鬼 口用 嘘急如律令

口者 口用

嘘急如律令

主の男を嫌よき術

合山鬼喰急如律令

女



燒亡い物の木までさるれども
あら人あればそこでひどまる
此うを書表の戸のうらみ貼べー

火のび来らずといふ

○羽蟻出ざるまゝない

モニハリ品のゆけ解へやせ

の桶鉢で吹きの御りそり重よ

斯のぞとく歌を逆様みかきて羽あり

の出るホキを重置べー

○乳風のまじない

此字を乳の腫たる處は一字あき

其ノへを墨よてねるべー

○なもしの意ふるを治すまゝい

やちもーのできー處へ南と云一宇

若半ぶん治ーとく思ひや南の字を半

分りき墨をねるべー

○鼠のあれぬまより

輪 署 吕大痴 日日日急急如律令



○やけどのまトなひ

猿さるの池のほとりに有けるが
あゝかの入道かふてこそいれ

此うたを三べん説てやけどせし處を

口みて吹まねと三度して又其とごろ

を足みて踏まねを三度すべし

○口いがを治すまゝい

目いがのでききるを畫へべよて三度

踏るまねーながら

隣のふうたに何を一やる。こちい



めいがを括りますと三べんいふ

べー

又曰い不のさきへ杓の柄のさきを當

目ふそれ大のくそ

となふべー

○悪き夢見せし時のまやなひ

夜みつる今宵のゆゑに悪ろ也

遼へる戸の下よねねれい

此を三べんよもべー又

大はらやみうりの歌み立鹿わ

ちろひをすれに許されみけり

○唱ふ物より一時のまやない

十二 九龍化骨袖候身

是を酒杯の中より書き水をへてさき

存ますべー

○此外さまあれ共大機を認す

えかひ初傳終

〇有卦無卦の事



○有卦入日ヨリ
ふの頭ふ
つく品もの
を七個集め
まづり
祝ふな

○木性のへい酉の年酉の月(旧八月)
酉の日酉の刻(午後六時)より有卦は
入りて七年の間、万よし右七年経れ
ハ八年目より五年の間は無卦みてわ
るし何ごとも慎(もべ)

○火性の人の亥の年子月(旧十月)
子の日子の亥平后土(神)より有卦は入
り七年みて八年より無卦五年の間
なり

○有卦入日ヨリ
ふの頭ふ
つく品もの
を七個集め
まづり
祝ふな

○木性のへい酉の年酉の月(旧八月)
酉の日酉の刻(午後六時)より有卦は
入りて七年の間、万よし右七年経れ
ハ八年目より五年の間は無卦みてわ
るし何ごとも慎(もべ)

○火性の人の亥の年子月(旧十月)
子の日子の亥平后土(神)より有卦は入
り七年みて八年より無卦五年の間
なり



左 絶雲の秋
右 絶雲の秋
左 絶雲の秋
右 絶雲の秋



左 嘴の交
右 嘴の交
左 嘴の交
右 嘴の交



守
燈明
芭
うざれバ其靈をま
礼とづくして奉し
吾父母死て世小あ

よめだまみ」と聞へ次小おの歌と
ことあめべ
(千早振神の御かけふかひあば
こよろしく祭る御尤しお
のかけぬかるいみぞ)
いさきよく神の恵みのつよければ幾
久くぞ榮えほてりる)



四十一

○土性又金性の人ト午のと一年の月
(旧五月)午の日午の刻(午前十二時
より)へ七年のあいざ有まり右七
年となりて八年めより五年無卦なり
○水性の人に卯の年卯の月(田二月)
卯の日卯の刻(午前六時)より有卦よ
入り七年を以れば八年めより無卦よ
入るなり

○ふの字の頭よつけ呼品の大體
○ふで○ふろ○ふ先○ふくろ○ふね
○ふき○ふみ○ふとりやま○ふるい
○ふぢの花○ふか○ふや○ふくすけ
○ふくろく壽○ふさ○ふな○ふせこ
○ふらふ○妙○ふき○ふくすけ

誕生日神祭の吏



侍賢門院

けんもんのんの

後藤川

かわ

長かじ翁

なが

もんも

もん

黒クミの

くろ

丸毛子

まる

今翁へ

いま

角をあわせ恩へ

の



正月	とら	二月	み	三月	さる
四月	あ	五月	う	六月	むすめ
七月	とり	八月	ね	九月	なづ
八月	ひし	十一月	いぬ	十二月	じ

○願成就吉日
ねがひえかふよそひ

未年の人 白かみ上小洗ひ米
申年の人 黄紙の上小豆行き
酉年の人 黄かみの上小豆もち一重
戌年の人 黄かみの上小大もち
亥年の人 白紙の上小茶碗小水と入供

辰年の人 藍かみの上小白豆
巳年の人 紫かみの上小豆
午年の入 紫かみの上小豆
未年の人 白かみ上小洗ひ米
申年の人 黄紙の上小豆行き
酉年の人 黄かみの上小豆もち一重
戌年の人 黄かみの上小大もち
亥年の人 白紙の上小茶碗小水と入供





○潮汐満干時刻

正月五日	正月五日	正月五日
二月六日	二月六日	二月六日
三月七日	三月七日	三月七日
四月八日	四月八日	四月八日
五月九日	五月九日	五月九日
六月十日	六月十日	六月十日
七月十一日	七月十一日	七月十一日
八月十二日	八月十二日	八月十二日
九月十三日	九月十三日	九月十三日
十月十四日	十月十四日	十月十四日
十一月十五日	十一月十五日	十一月十五日
十二月十六日	十二月十六日	十二月十六日



○同六時より降ハ凡そ半日ふる
○同八時よりふるハ長くふる



- 春雨ふりづきて後う山方の山根すき又くもちぎれたるハ晴て晴る
ある一あり此とき風ノ東をこし北小
か豆さるものあり
- 夏至から西南の風ふくハ真な
つ大は暑し
- つゆのうち朝東りせ二三日もつき
小くハ晴て日和小あるなり
- 春大はさもなく筈もあつて秋あわ
かみ涼しく冬あくまであるハ雨ふる
ある／なり
- 筈土用之中ハ東かぜ吹バ天氣よし
又西かぜもふくものなり
- 秋のえあゑ頃小夜ひやゝかあれバ
風も一暑けれバ雨ふるそあり又あさ
めあハ雨ふり夕やけバ日和あり
- 秋の日北かぜふけバ雨ふる又夜の
北かぜハ晴ぶり
- 寒のうち天氣よくでけば其年あめ
すくぶ／



○四季とも小日の出小むかひ雲ゆけ

パ其日ひよりも一

○正西より吹風ハ雨なし此風ハいつも

冷やかなう西北風も晴あり

○東風ハ雨が成べきもの成べども梅雨

と土用の中小い吹とも西ふるとも晴る)

天あま無なきく
至いたて青あお

さハ三日みにち
の内うち小雨こあめ

ふる
○下おる雲くも
早はやくきわる

大風おおぬ
きざしありスくもきれく、小成こせいて早はや

くゆくも大風おおぬふなり

○子こじ早くきゆるハ風かぜ小こくあり又また

らく成なるハ雨あめ小こるスあとさき中の早はや

くきゆるハ大おおかぜあり

室むろ院いん波なみあつ
羅ら波なみははわわがが歯は

一ひと夜よゆゆ
翁おきと車くるま一ひとててや

翁おきりりのの里さとのの宿しゆく



式子内親王しきこないしんのう
御内ごうちのの後ご、然しかららも絶絶望ぼうぐぐへへぬ

車くるま一ひと夜よゆゆ
翁おきと車くるま一ひとててや

翁おきりりのの里さとのの宿しゆく

流星のうちふひ

○流星東とうより南みなみぶうり

れいせうふうり

○西にしより東とうへうつれば

二ふた日ののうち雨あめぶ

○東ひがしより西にしうつるべ

明日あさあめあう

○南みなみうつればひで

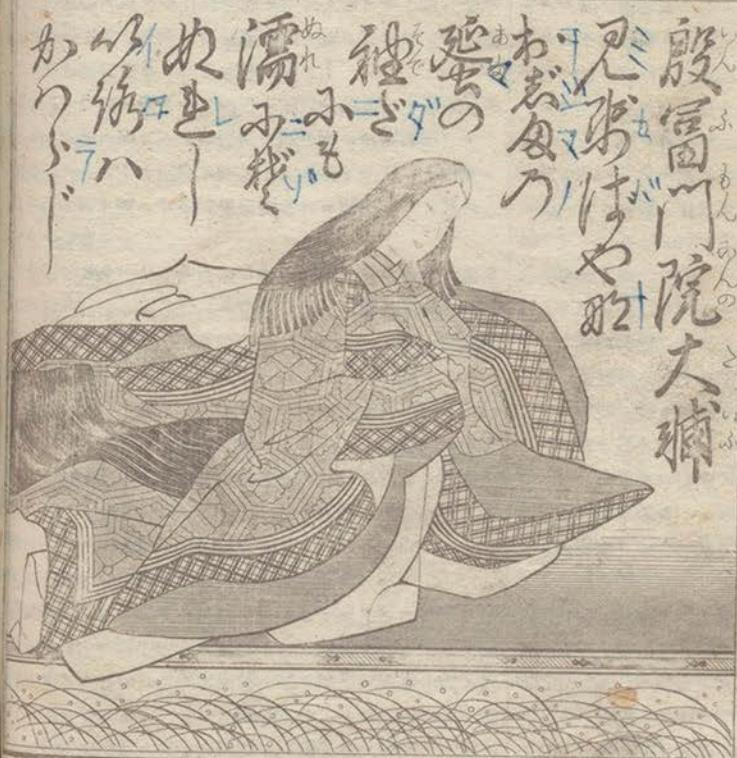
北きたひづれい大おほき風かぜく



壬	癸	性	辛	木	余	庚	己	未	午	未	戌	性	戊
戊	年	二	木	酉	和	享	二	木	申	二十	火	火	午
甲	申	九	土	未	年	八	一	土	午	年	七	木	十政寬
午	午	五	金	巳	年	四	九	金	辰	年	三	水	五政天
辰	辰	三	水	卯	年	二	八	木	寅	保	天	土	寅政文
寅	寅	三十	土	丑	年	二十	七	土	子	二十	火	子	一十一
子	子	五	金	亥	年	四	六	金	戌	年	三	火	亥年九
戌	戌	二	木	酉	久	文	五	太	申	延	火	火	午年五
申	申	二十五	土	未	年	四	四	土	午	年	三	木	午年明
午	午	五十	金	巳	年	四十	三	金	辰	年	三十	土	辰治一子
辰	辰	五	太	卯	四	廿	二	木	寅	三	廿	火	子一廿

性	丁	未	戌	丙	未	壬	性	乙	未	戌	性	甲
土	巳	年	九	六	土	辰	午	八	七	水	未	寅
火	卯	年	四	五	火	寅	午	三	六	金	午	政
水	丑	年	五	四	水	子	三	十	五	火	未	寔
土	亥	年	十	三	土	戌	午	九	四	水	未	化
火	酉	年	八	二	火	申	午	七	三	金	午	文
水	未	年	四	一	水	午	年	三	二	木	未	歲
土	巳	年	四	九	土	辰	午	三	一	火	未	安
火	卯	年	三	八	火	寅	午	二	九	金	午	弘
水	丑	年	十	七	水	子	午	九	八	火	未	辰
土	亥	年	十二	六	土	戌	午	十	七	水	未	本

年齡並納音本命早繩



生月二十	月ケ一十	生月十	生月九	生月八	生月七	生月六	生月五
月ケ二	月ケ三	月ケ四	月ケ五	月ケ六	月ケ七	月ケ八	月ケ九
月ケ三	月ケ四	月ケ五	月ケ六	月ケ七	月ケ八	月ケ九	月ケ十
月ケ四	月ケ五	月ケ六	月ケ七	月ケ八	月ケ九	月ケ十	月ケ十一
月ケ五	月ケ六	月ケ七	月ケ八	月ケ九	月ケ十	月ケ十一	月ケ十二
月ケ六	月ケ七	月ケ八	月ケ九	月ケ十	月ケ十一	月ケ十二	月一満
月ケ七	月ケ八	月ケ九	月ケ十	月ケ十一	月一満	月一年	月一年一
月ケ八	月ケ九	月ケ十	月ケ十一	月一満	月一年	月二年	月二年一
月ケ九	月ケ十	月ケ十一	月一満	月一年	月二年	月三年	月三年一
月ケ十	月ケ十一	月一満	月一年	月二年	月三年	月四年	月四年一
月ケ十一	月一満	月一年	月二年	月三年	月四年	月五年	月五年一
月ケ十二	月一年	月二年	月三年	月四年	月五年	月六年	月七年一
月一年	月二年	月三年	月四年	月五年	月六年	月七年	月八年一

生月四	生月三	生月二	生月一	月レ生	月當
月ケ十	月ケ一十	年一満	月ケ一年一	月一	
月ケ一十	月一年一満	月一年一	月二年一	月二	
年一満	月一年一	月二年一	月三年一	月三	
月一年一	月二年一	月三年一	月四年一	月四	
月二年一	月三年一	月四年一	月五年一	月五	
月三年一	月四年一	月五年一	月六年一	月六	
月四年一	月五年一	月六年一	月七年一	月七	
月五年一	月六年一	月七年一	月八年一	月八	
月六年一	月七年一	月八年一	月九年一	月九	
月七年一	月八年一	月九年一	月十年一	月十	
月八年一	月九年一	月十年一	月十一年一	月十一	
月九年一	月十年一	月十一年一	月十二年一	月十二	

〇年

月早縁

癸

亥

戌

酉

申

未

巳

丑

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未

未



四十七



七夕祭手向和歌

七夕の戀や此もりて天の川
あれなる中のふちと成らん
ての河も初秋のみじう夜を
ながたあむとの契りそめげん
幾年を行めくりても七夕の方
なり絶ぐ夜半のあそび
ひくて今宵ものぞや七夕の
あくら小臺のつらざるさん
振づとの心のうちやりあぶらん

まちあし今日の夕ぐれの空
七夕の契りながれ是回り西は
てあひの月のいくよみのせん
くれ行は逢せかわせ天の川
水かけ草のつゆの玉光し
萬代の君ぞ見るべきなぞとの
行合のそりハ雲のうへふれ
七夕のちだり待間のなみどより
露の夕のものとやれとし
草の葉ふけふとる露や七夕の
秋のたむけ小結びそめげむ
年と経て住べき宿の池水小
星合の影もあれやせん
天の川一夜むらりのぬはせ
つら死神代のうみ成ち人
七夕の恋の契りの玉かけら
幾秋かけて結びおきげむ
天のぎれ秋をちぎりし吉の葉や
こたるものみぢのたしと成らん
七夕のうこす



筆の説



紙の説



墨の説



硯の説





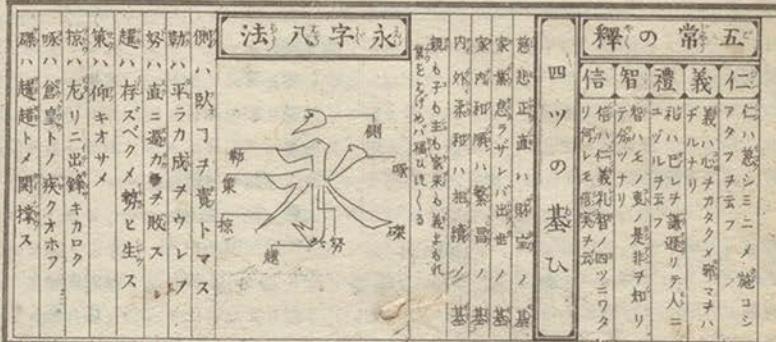
43977



編輯者 桶口正三郎
大坂市東區渠町四丁目二十一番屋敷
發行者 蕪印刷者 赤志忠七

所版
有權

明治三十一年九月廿三日
周刻



K. K. R. K. H. M. O. P. I.

K



177

177